

役所の苦勞

向原中学校 三年 小澤 由夏

「いやあ、じいじが二十代の頃は自転車税というものがあってそれを納めていない自転車を追いかけていたものだったなあ。」

税金について考えていた時に思い出したのは、市役所で四十年以上も働き続けた祖父の言葉だった。

祖父は市に納めなければならぬ税金を様々な理由で払わない人に、一生懸命説得する仕事をしていた時期があった。納税は国民の義務であり払ってもらわないと、やらなければならない市の仕事ができなくなる。そのため市の蓄えがなくなってしまう。市の蓄えがなくなると急に大規模な災害が起きた時や今年のような緊急事態宣言が出された時に特に困るそうだ。また東京のように大きな工場や会社が多くあるわけではない地域には企業から払ってもらう税金も多くない。国や県に頼るしか方法がなくなる。このように多くの市町村はやりたい仕事もやることができず、赤字になる市町村もある、と祖父は真剣な顔で語っていた。

祖父は税金の使い道を考える仕事もしていたことがあった。全ての市民が平等に恩恵を受けられる税金の使い道を考え、それをまとめて議会に提出する。議論を重ね、ようやく承認されることもあるそうだ。全ての市民、国民に平等にしなければならぬため赤字地域と東京のような都会とで不平等にならないように国が考えてくれ

ることもあるらしい。

税金がなければ国や県、市町村は国民のための仕事ができなくなる。税金を納めるのは大変だが、納める人にとって税が適切に使われているか関心を持つことが大切だ。税の使い道はその市町村の広報紙に報告されている。しっかりと自分の意見を持ち、この税の使い道はおかしいと思ったら、おかしいと発信してほしいと祖父は訴えていた。

私は祖父の話聞いて、税金を納めるのはもちろん大変だが、税金を集めたり使い道を考えたりする役所の人の大変さもよく分かった。私もこれからきちんと税について関心を持ち、祖父達の苦労が無駄にならないよう、暮らしやすい町づくりに貢献したい。